

# ユダヤ教は『自死』をどう受けとめてきたか<sup>1</sup>

ジョナサン・マゴネット  
日原 広志 (訳)

## 聖書物語から

ヘブライ語聖書は自死という行為に対して、非難することも、大目に見ることも、何らの明示的な姿勢も提供してはいません。むしろそれ〔ヘブライ語聖書〕<sup>2</sup>は、ある者が一どの事例でも男性ですが一自らの命を絶つ〔に至る〕状況を簡潔に描写した物語中に少数の例を提供するのみです<sup>3</sup>。女性を巻き込んだ唯一の事例〔を含めるか否か〕は、何が彼女〔エフタの娘〕に起こったかについての記事〔士師記11章〕を、どのように私たちが読むかにかかっています。より後代のラビ的伝統がこの問題をどのように扱っているかを熟考する前に、多少詳しく聖書における諸例を検証する価値があります。

聖書における諸例のうちの三つ〔サウルとその従者、アビメレク〕は戦場での死です。サウル王はペリシテ人との彼にとって最後となる戦闘の中にいます。聖書は彼の三人の息子たち、ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シユアが既に討ち取られてしまっていたと記します。今やペリシテ軍がサウルに迫

---

1 訳注：これは 2019 年 6 月 13 日、西南学院大学大学博物館 2 階講堂で行われた大学  
学術研究所主催の公開講演である。原題は、“Attitudes to Suicide in Jewish Tradition”。

2 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

3 もう一つの付け加え得る事例はクーデターによって北イスラエル王国の王となった  
ジムリである。彼の統治は自身も〔同様の仕方〕で打倒されるまでたった七日間しか  
持たなかった。彼は王宮に避難し、それ〔王宮〕は彼を殺しつつ、彼の周囲に焼け落  
ちた。そのヘブライ語聖書本文（列王記上 16:18）は彼自身が火をつけた一つまり自  
死の行為一か、彼を迫撃した者たち〔が火をつけた〕のかどうかを明らかにしていない。

り、矢を射る者たちが彼に深手を負わせたところです。

サウルは自分の武器を持つ者に行った。「お前の剣を抜いて、私を刺し殺してくれ。あの無割札の者どもがやって来て、私をなぶりものにするのがないように。」だが、武器を持つ者は非常に恐れ、そうしようとしなかったので、サウルは剣を取り、その上に身を投じた。武器を持つ者はサウルが死んだのを見ると、自分も剣の上に身を投げ、サウルと共に死んだ。(サムエル記上31:4-5)<sup>4</sup>

その記事は、自分の敵たちにいかなる満足も与えなくなかったのか、彼らが自分に対してしようとしていることについて本当に怖れたのかはともかく、王の側の最後の自暴自棄な一挙手一投足を活写しており、大変心を動かされます。彼の武器を担ぐ者は、「大いに怖れた」ので、サウルを殺すのを躊躇します。これは彼が単にそうすることを怖がっただけともとれますが、そうでなければ彼が、神に油注がれて王となった人物を殺すという行為の畏怖すべき本質に触れたことを意味するでしょう。サムエル記の読者たちは、ヨナタンの武器を担ぐ従者によって演じられたあのーペリシテ本隊への単身乗り込んでの戦いにおいて彼〔ヨナタン〕と行動を共にしたー力強く親密な支持的役割を想起するかも知れません(サムエル記上14章)。サウルの武器を担ぐ者が自らの命を絶った時、それは自らの王に対する究極的な忠誠の行為でした<sup>5</sup>。

聖書本文は起こった事の描写のみを提供していますが、私たちはサウルの個人史について多くを知っています。すなわち音楽によってようやく和らげることのできた彼の重度の気分変動、神に捨てられているとの挫折と絶望、預言者サムエルの彼に向けられたあの迫害にも近い態度、サウルのダビデへの愛憎入り交じった挙げ句の怒りと偏執症〔などです〕。死の少し前、絶望したサウルはサムエルを死者の中から呼び出しますが、来るべき戦闘で自分と

---

4 訳注：以下日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。

5 ついでながら、ダビデもまたそのキャリアの始めにサウルの武器を担ぐ従者であったと記されている。(サムエル記上 16:21)。

息子たちが死ぬ事になるとの仔細を聞かされるだけに〔終わります〕。サウルにとって、戦場での死は、いかに彼がそれをペリシテへの最後の抵抗として表現したとしても、自らの悩み多き支配の中での情緒的苦痛と苦悩からの歓迎すべき解放でもあったことでしょう。それでも、その行為をしてくれと自分の武器を担ぐ者に頼んだことは、サウルが自らの行動についての責任を否認しようとする、彼の人生で多くの機会〔に見られたもの〕のおそらく最後のものでした。結局、彼はとうとう自分の運命に責任を持つことになったのです。

戦場における死のもう一つの事例－士師記に記された暴君アビメレクのそれですが－において、武器を担ぐ従者は自分の指導者をさっさと始末することに関して全く何の良心の呵責も抱いていなかったように見えます（士師記9：54）。〔サウル同様ここでも〕再び、自らの手による死が切望される理由が示されます。アビメレクは、イスラエルの戦闘を勝利に導き40年間彼らを〔士師として〕裁いたギデオンの息子です。しかしギデオンが多くの妻によって70人の息子たちをもうけていたのに対して、アビメレクは、ギデオンの側女、〔しかも〕シケム出身の女性〔おそらくはカナン人〕の息子という〔二重の意味での〕アウトサイダーでした。支配者になるとの野心から、彼は政治的クーデターを計画的に実施し、ギデオンの70人の息子たちを処刑し、シケムの人々によって王として認められました。しかしこれら暴力的行動が、今度は彼に対する反乱の続発を招きます。結局テベツの町を包囲した際に、ある女性が彼の頭上に投げ落した石臼が彼に致命傷を与えました<sup>6</sup>。彼は自分の武具を担ぐ従者に自分を殺すよう頼んで言うのです。「誰も私について言うことがないように。一人の女が私を殺した！」（士師記9：54）<sup>7</sup> 顔面通りに受け取れば、これは己が男らしさを誇り、一女性の手にかかっての死という恥辱を蒙りたくないという、戦士の態度を反映しているように見えます。し

---

6 訳注：アビメレクについては Jonathan Magonet, “Avimelech: The Rise and Fall of a Biblical Dictator”（日原広志訳）「アビメレク－聖書に登場する一人の独裁者の興隆と衰亡－」『西南学院大学神学論集』第73巻第1号（2016年3月）、101-116頁参照。

7 訳注：講演者による。協会共同訳は「私が女に殺されたと言われないうために」。

かしここに、アビメレクのより初期の歴史における何か－彼の支配欲を掻き立て続けたように思われる、側女の子という自らのアウトサイダー的地位－が反映されていると見ない〔で済ます〕ことは困難です。一女性の手にかかっている死は、彼の不名誉という円環を〔一巡して〕閉じ終わったことになるでしょう。最初に彼を行動へと駆り立てた悪霊たちが、最後に彼に取り憑くために戻ってきたように思えます。〔サウル同様ここでも〕再び、聖書物語の簡潔な記録の下に、彼の暴力的経歴と、恐らくは彼の死への願望さえも動機付けたところの、心理学的混乱と動因についての諸々の兆候が存在します。

士師記のサムソンについての物語は、彼の生涯について豊富な情報を供給しており、彼の感情的態度を探求する機会を提供します。彼は神の使いによって誕生を告知され、不妊の女から生まれました。彼は子どもの頃からナジル人の誓いの下に生きるべく重圧を負わされたので、彼の振る舞いはこれらの制約に反抗したいという一貫した切望を反映しているように思われます。その上さらに彼の性欲は、彼を自分の民の敵であるペリシテ人女性との危険な恋の戯れへと導きます。ついにデリラに裏切られて、盲目にされ、そしてペリシテ人たちの前に嘲られるために引き出され、彼は建物の柱を引き倒すことによって復讐を遂げました。「彼が自らの死と引き換えにして殺した者は、生きている間に殺した者よりも多かった。」(士師記16:30) 聖書は、彼の恋の戯れはペリシテ人との軋轢を引き起すよう意図されていたことから、神がこの英雄らしからぬ諸行動の背後に立っていたということを指示しています。それでもやはり、自民族のための殉教という英雄的行為と過去において見なされてきたであろうものは、今日自爆テロと無辜の居合わせた人々の死を考慮すれば、より陰鬱な様相を帯びています。ここでは、居合わせた人々はサムソンの辱めを見物し愉しむためにそこにいたのですが、私たちはまたこの異なる同時代的観点を考慮してその事象を眺めなければならないのです。サムソン自身にとっては、どれほど彼が神の名を持ち出していたとしても、彼の意図は純粹に個人的でした。「主なる神よ。どうか、私を思い起こしてください。神よ、どうか、もう一度私を強めてください。そうすれば私は、自分

の両目のために、存分にペリシテ人に復讐するでしょう！」(士師記16：28)<sup>8</sup> 彼が何度も〔それに〕従って彼の性的冒険へと至ったところのその両目を奪われ、貶められた状況にあって、彼は死への自らの願望を報復の武器へと変えたのです。

大変異なっており、実に計算され、全く合理的なのは、アヒトフェルの動機です。並外れた知者として知られる、ダビデ王の信頼厚い助言者〔であった〕にもかかわらず、彼〔アヒトフェル〕はダビデの息子アブシャロムと一彼〔アブシャロム〕の彼の父〔ダビデ〕への反乱に際して、〔やはり〕助言者として一行動を共にしました。何故アヒトフェルがそうしたのかについては、その物語において直接は明らかにされていません、しかし聖書中のいくつかの相互参照は、彼がダビデに夫ヘト人ウリヤを殺害されたバト・シェバの祖父だったことを示唆しています<sup>9</sup>。結局アヒトフェルの計画は、アブシャロムの虚栄心に何とかつけ込んで、ダビデに逃亡と〔軍の〕再編の時間を与えようとする、これもダビデの助言者の一人フシャイによって妨害されます。アヒトフェルの知恵はそれほどのものであるので、彼にはまさにその瞬間から早くもアブシャロムの反乱の破局的終焉が、そして自分の反逆行為のために自分自身と家族の身に起こりそうな結末も予見できてしまいました。驚くべき簡潔さと威厳ある記事中に、聖書は彼の諸行動を叙述します。

アヒトフェルは自分の提案が実行されなかったことを知ると、ろばに鞍を置いて出発し、家に帰ろうと自分の町に向かった。彼は自分の家を整理して、首をくくって死んだ。そして自分の先祖<sup>10</sup>の墓に葬られた。  
(サムエル記下17：23)

---

8 訳注：「そうすれば」以下は講演者による。協会共同訳は「私の両目のうち、片方のためだけにでも、ペリシテ人に復讐させてください」。ヘブライ語聖書本文は「両目のための復讐の一撃」とも「両目のうち一方のための復讐」とも訳し得る。

9 サムエル記下 11:3, 23:34。

10 訳注：複数形「先祖」(fathers)は講演者による。協会共同訳は「自分の父の墓に葬られた」と単数に訳している。

反乱を立案指導してきたのと全く同様に冷徹に計算された仕方で、彼は自分の家を保護するために必要とされることを行いました。それから当時の習慣であった通りに、彼が自身の先祖と共に葬られることを確実にした上で、自らの命を絶ったのです。ここで興味深いのは、彼の自死にも関わらず、彼がどこに埋葬されるべきかという、ラビ時代<sup>11</sup>には重要となる主題に関して、何らの問題も提起されていないことです。

上述の例全てが極限状況下の故意の自覚的な自死的行為としてみなされ得るものです。〔一方〕自死の行為とは伝統的にみなされていないが検証に値するもう一つの聖書エピソードがあります。それはアロンの二人の息子ナダブとアビフの事例で、彼らは自分たちの香炉を取ってその上に香を焚き、聖所の中で神の御前へ「命じられていない規定外の火」を持ち込んだところ、天から火が彼らに降り注ぎ、焼き尽くされました（レビ記10：1-2）。このエピソードは幕屋建設完了の記事の直後に続いています。初の献げ物がなされた時、天から火が臨んでそれらを焼き尽くしました（レビ記9：24）。この並置は初の献げ物を焼き尽くしたそのままに同じ火が、またアロンの二人の息子を襲ったことを示唆しています。彼らが聖所に持ち込んだ「命じられていない規定外の火」が何を意味するのかは全く明らかではありません。しかしこの奇妙なエピソードは、モーセに対するコラハの反乱についての物語中にその並行例を持っています（民数記16章）。反乱に加わった者たちの中には〔どの部族の誰とも〕同定されないが、〔ここでも〕また香を満した香炉を持ち込み、同様に神の火で焼き尽くされた250人がいました（民数記16：35）。コラハの物語の中心にはアロンの家の祭司職と、聖所の奉仕に携わるレビ人との、それぞれの役割を巡る問題があります。祭司のみが使われる祭具を直接に取扱うことができました。しかしレビ人は聖所のあらゆる器物の運搬に責任を持っていましたが、あくまで祭司がそれらを覆った後ようやくそれらを取扱うことができるのみでした。このようにレビ人は、聖所のヒエラル

---

11 訳注：ここでは術語「ラビ時代」はタンナイームからゲオニームまで（1-11世紀）を緩やかに包括している。

キーにおいて祭司より低い地位にあったので、抗議するため反乱に加わったのです。もう既に〔16章以前に〕民数記は適正な秩序を侵害した場合の重大な帰結について警告してきました（民数記1：53，8：19。また〔16章以降ではあるが〕17：11と比較せよ）。コラハのエピソードにおいて、レビ人は自らの特別な地位を受け入れよとのモーセの説得に納得したようで、彼らは反乱から去りました。しかし〔16章〕より早くレビ人は「初子」－その務めは初期には犠牲として献げられることでした－の代理とな〔るよう聖別されることで初子の地位を取〕っていました（民数記3：11-13，44-51）。このことはかの〔レビ人が去った後もなお反逆する理由の残っていた〕250人の男たちは、神への奉仕における彼らの特別な〔レビ人に取って代わられた〕役割を保持しようとしていた「初子」〔どの部族かは不明だが長子たち〕だったのであり、だからナダブとアビフが持っていたように彼らも香炉を手にしていて、ということを示唆するでしょう。

何がアロンの二人の息子をしてそのような過ちを犯すに至らしめたのでしょうか。ナダブとアビフはもう一つの重要な聖書のエピソード、つまり神がイスラエルとの契約に入った時、シナイ山での顕現場面において登場しています。その儀式化されたプロセスの結びの最後に、モーセとアロン、その二人の若き祭司と70人の長老はかの山へ登り、そこで御座に座している神の幻という、聖書記録中でも比類なき集団的神秘体験に与りました（出エジプト記24：9-11）。<sup>12</sup> 私が示唆しようとしているのは、この圧倒的な体験がその二人の祭司に深い影響を与え、彼らに神とのより緊密な接触を切望させていったということです。彼らをして軽挙に、また不適切な仕方です聖所に立ち入り、結果神の火に曝されるに至らしめたものこそ、この切望だったのです。神に仕えたいという圧倒的な切望から、彼らは自ら文字通り「犠牲」「焼き尽くすいけにえ」となったのです。このエピソードを取り巻いている曖昧さは、それに対するモーセの返答の中に一もっと正確に言えば彼の返答についての

---

12 イムラの子ミカヤ（列王記上 22:19）、イザヤ（イザヤ書 6 章）そしてエゼキエル（エゼキエル書 1 章）は同様な個人的幻視体験をしているが、預言者としての役割においてである。

異なる解釈の仕方の中に一確認され得ます。

モーセはアロンに言った。『私に近づく者によって、私が聖なる者であることを示し、民全体の前に栄光を現す』と主が言われたのは、このことであった。」アロンは黙っていた。〔(レビ記10：3)〕

その明白な意味は、神のみが、誰が神に「近づき」、犠牲を献げるに相応しい人物—つまり適切に任命された祭司たち—であるかを決定するということです。この読みに基づけばアロンの息子たちは聖所に関する厳格なヒエラルキーの規定を破ったので罰せられたことになります。しかしもう一つの解釈がラビ文学においてなされていますので、ここでは偉大な中世の注解者ラシによる引用から紹介しましょう。

モーセはアロンに言った。「我が兄アロンよ！私は、この家は遍在する方 (the Omnipresent)〔ヘブライ語「ハ・マコム」の直訳は「かの場所」。神を意味するラビ的名称〕の最愛の者たちによって聖別されることになるとは知っていたが、私はそれが私かあなたのどちらかであろうと思っていた。今ようやく私には分かった。彼らは私やあなたよりも偉大だったのだ！」(レビ記注解当該章句部分、ゼバヒーム115b)

すなわち、二人の若者の死は間違っただけをした故の罰としてではなく、それ自体個人的犠牲の行為、神によって受け入れられた「聖別」として理解されることになります。

同じ線に沿って、コラハの反乱の物語において、もしあの250人が実際に、今や神に直接仕えるという自らの特権を喪っている初子だったとするなら、彼らの切望は彼らを、それでもその祭司的役割—それが変更されてしまった後でさえ—を引き受けることへと導いたのです。彼らもまた、神に近づきたいという自らの願望によって—文字通りに、また隠喩的に—焼き尽くされたのです。そうした解釈はモーセが引き続いて下した指令によって確認されません。



命を失った罪人たちの火皿を打ち延ばして板金にし、祭壇の覆いを作らせなさい。それらは主の前に献げられ、聖なるものとなった。(民数記 17:3)

もしこれがその二つの出来事についての理に適った説明であるなら、それは「自死」に関するもう一つの動機づけ、神に仕えるという熱狂的な情熱－歴史を通じて宗教的殉教者を生み出し続けてきた例の感情－を示唆します。

熟考すべき聖書の諸例の最後のエピソードはエフタの娘の運命についての忌まわしい物語です(士師記11章)。軍事的勝利を求めて、エフタは神に、成功した暁には、彼の帰還を迎えに出て来る最初の「もの」を犠牲として献げるとの誓いを立てます。結局それは彼の娘でした。聖書は簡潔に彼が誓願通りにしたと記し、伝統的解釈はこれを、彼が彼女を犠牲として献げたことを意味すると想定します。私たちの観点から重要なことは、その娘は事の仔細を知るに及んで、父が神へ誓った以上たとえ自分自身の命を犠牲にしてもそれは果たされねばならないと、極めて力説している点です。もしも事態がそうであるなら、彼女が進んで犠牲となろうとしていることは、父の名誉を守り、神に対してなされた誓いへの彼女の忠誠を示すために実行される自死です。しかしながら、彼女の実際の運命については疑問があります。既に中世の聖書学者ラビ・ダヴィド・キムヒは、彼の父〔による解釈〕を引用しつつ、彼女の運命は殺されることではなかったと示唆しています。その代わりに、彼女は物理的隠遁の、とりわけ結婚が出来ない、それ故－聖書世界において女性にとって明らかに大きな犠牲であったところの－子どもを持つ可能性を諦めるという人生を送った〔とされます〕。彼女は女友達によって毎年訪問されることになり、聖書はこれがイスラエルのしきたりとなったと述べます。けれどもそうした伝統についてのさらなる言及が他の箇所にも全く存在していないので、それは彼女の生涯の間だけに限定されたものであったように思われます。〔アビメレクに続いて〕再び、物語それ自体、そしてあの不合理な誓いの理由の背後に、受け入れられない女－今度は〔側女でなく〕遊女で

すがーの息子であり、それ故、嫡出の兄弟たちから拒絶と追放に遭った男の物語があります。戦闘において民を指揮してくれれば、首長として遇すとの〔ギルアドの長老たちからの〕あの申し出は、エフタに彼の社会的地位を回復する可能性を表すものでした。しかしこの地位は、もし彼の娘が全く子孫を残さないとしたら彼一代で途絶えることになります。だからこそその誓いの切迫性〔ですし〕、またその不条理性〔なのです〕。ついであるが自分の娘が彼を迎えに出て来る最初のものになる可能性は、戦勝兵士を歓迎しに楽器を手に出て来る若い女性たちの慣習が〔聖書に〕あるので（サムエル記上18：6）、なおさらありそうなことです。エフタと彼の娘どちらの事例においても、私たちは肉体的というよりもむしろ一種の霊的な自死について論じ合えるかも知れません<sup>13</sup>。

ヘブライ語聖書を去る前に、私たちは自死志願者－あるいは少なくとも決して果たされなかった死の願望－についての他の2つのエピソード〔エリヤ、ヨナ〕に言及すべきでしょう。王妃イゼベルから逃亡中、預言者エリヤは神に自分の命を取ってくれるよう求めました。「主よ、もうたくさんです。私の命を取ってください。私は先祖にまさってなどいないのですから。」（列王記上19：4）彼の要求はかなえられず、代わりに神は天使を遣わし、彼に食べ物を与え、彼を道半ば〔の使命の更なる遂行へと〕送り出します。おそらくはエリヤと反響するよう意図的に構成された状況下で、預言者ヨナは同様に神に自分を死なせてくれと求めます。「主よ、どうか今、私の命を取り去ってください。生きているより死んだほうがましです。」（ヨナ書4：3）どちらの事例もその要求はかなえられず、そして実際に両方の物語とも、絶望している預言者を犠牲にして、ある皮肉めいたユーモアを表現しています。しかしヨナの場合、より早い〔ヨナ書1章に〕失敗した自死の試みがあります。ニ

---

13 エフタの娘の運命を巡るこの解釈の詳説については拙論 [thetorah.com/did-jephthah-actually-kill-his-daughter/](http://thetorah.com/did-jephthah-actually-kill-his-daughter/)を参照。〔訳注：また、より詳細な拡張されたヴァージョンは Jonathan Magonet, “Did Jephthah Sacrifice His Daughter and the King of Moab His Own Son?”（日原広志訳）「エフタは娘を、モアブ王は己が息子を、犠牲としてささげたのか？」『西南学院大学神学論集』第76巻第1号（2019年3月）、45-62頁参照。〕

ネベに行くようにとの神の委託を受け入れるどころか、ヨナは海へと逃げ去り、彼の逃亡が船乗りたちによって暴露されるに及んで、自分の使命に着手するから陸地へ戻してくれと頼むのではなく、海へ投げ入れてくれと頼みました。船乗りたちは彼に、そうすることは彼らの側からすれば殺人の行為になると思ひ出させます。また、なぜヨナは、必要とされる一切は一人で海へ飛び込むことだけである局面で、自分の死に彼らを巻き込もうとするのでしょうか。もし聖書が自死を非難している何らかの証拠が必要とされるのであれば、これら二つの事例は引用され得るかも知れませんが、それらはいずれも二人の大変自己中心的な預言者の自己憐憫と結びついており、それぞれの著者によってかなり皮肉を込めて取扱われています<sup>14</sup>。

上記全てのエピソードから明確なことは、気が付けば自らがそこにいたという特殊な環境で、自死によって自らの命を終わらせることを選んだ人々に対する、何らかの直接的に表現された否定的な聖書的判定の明白な欠如です。各人が、彼らを死まで導いていく役割を演じた複雑な—公的な、しかし私的でもある—人間ドラマを窺わせるところの「裏話」を伴っています。しかし、重要なことには、自らの命を絶つことを禁じる何らの直接的聖書法的命令も存在しないのです。

## ラビ的諸法

しかし、初期のラビ的権威者たちにとって、自死は—ヘブライ語聖書の場合と同様に、タルムードそれ自体の中に見出されるべきその行為に対する何らの直接的法的非難も存在しないのですが—明確に重大な犯罪であると考えられました。この姿勢の変化と見えるものの理由の一つは、ヘブライ語聖書

---

14 聖書資料の心理学的研究はヨブによって表現された死ぬことへの願望（ヨブ記 7:15）と預言者エレミヤの自分の誕生した日への呪い（エレミヤ書 20:14-18）をも含めることだろう。モーセでさえも神に自分を神の書から消し去るよう求めたことがある（出エジプト記 32:32）が、これは真剣な要求というよりむしろ交渉における初手であるように思われる。

内の死後の命についての高度に発達した見解の—そうした諸関心がより支配的になった聖書後の世界における大きな文化的諸変化とは対照的な—欠如の中にあるかも知れません。前者〔聖書〕の状況は典型的に詩編6編で表現されています。

主よ、帰って来てください。私の魂を助け出し／慈しみによって、お救いください。死ねば、誰もあなたを思い起こすことはありません。陰府にあって、誰が感謝を献げるでしょう。(詩編6:5-6)

同様にコヘレトの言葉3章20節〔にはこうあります。〕

すべては同じ場所に行く。／すべては塵から成り／すべては塵に帰る。

そうした世界観において、人間の一生の間に起こること〔だけ〕が問題となる全てあり、いかなる成功も失敗も、喜びも苦しみも、それらはその枠組みの内部で説明されることになっていました。詩編90編10節はこう表現します。

私たちのよわいは七十年／健やかであっても八十年。誇れるものは労苦と災い。瞬く間に時は過ぎ去り、私たちは飛び去る。

聖書後の世界において変化したものはヘレニズムの影響、魂の不死性と来世の性質についての問いをめぐる諸見解の吸収です<sup>15</sup>。その変化はサムエル記の一節に対して生じたことの中に確認できます。ダビデがナバルと呼ばれる男をまさに攻撃しようとした時、ナバルの妻アビガイルが介入し、ダビデに思い止まるよう説得しました。ダビデの将来の成功について語りながら、彼女は、彼の敵は死へと運命づけられているのに対して、ダビデは神によ

---

15 この問題についての概観については 'Hellenism and the Jewish Afterlife' Katie Maguire ([http://classes.maxwell.syr.edu/his301-001/hellenistic\\_effects\\_on\\_judaic\\_li.htm](http://classes.maxwell.syr.edu/his301-001/hellenistic_effects_on_judaic_li.htm)) を参照。

て守られ、生き続けるだろうということを意味しつつ「ご主人様の魂<sup>16</sup>は、命の袋に入れられて、あなたの神、主と結ばれています。」(サムエル記上 25:29)との言い回しを用います。ここで「魂」と訳されている単語はヘブライ語聖書で個人の「生命力」のようなものを意味する「ネフェシュ」です。しかし紀元後初めの数世紀に編纂された、同節に対するアラム語タルグムは、死後の命の重要性を指示しつつ、「私のご主人様の魂が、あなたの神、主の前で、永遠の命の絆で結ばれますように」と訳し、単語「永遠の」を付加しています。この言い回しについての異形は、ユダヤ人共同墓地の墓碑銘にも刻まれています<sup>17</sup>。

この新しい理解によれば、私たちの人生の処し方と終わらせ方が、その後で生じることに重要性を持つことになります。私たちの魂の究極的な運命は神の手中にあるということは、ユダヤ教の毎朝の祈祷の中に生き生きと表現されています。

私の神よ、あなたが私に与えた魂は純粹です。なぜならあなたがそれを創造し、あなたがそれを形造り、あなたがそれを私の内で生きるようにさせたからです。あなたは私の内にあるそれを見張っておられるが、ある日、あなたはそれを私から〔取り去り〕永遠の命へと連れて行くでしょう。

ラビ・エルアザル・ハ・カッパルに帰される、あるラビ的格言がこれに込められた意味を補強しています。

---

16 訳注：ヘブライ語のネフェシュ「魂」とハッイム「命」の訳し分けは講演者による。協会共同訳は「ご主人様の命は、命の袋に入れられて…」と両語を「命」と訳している。

17 その異形は「ネフェシュ」の語を「ネシャーマー」－神が最初の人に吹き込んだ「命の息」(創世記 2:7)－に置き換えている。後者の術語は今や、誕生時に私たちの内に植え付けられた魂は神へと還って行くという理念を表現するために用いられている。

あなたの意志とはかかわりなくあなたは生まれ、あなたの意志とはかかわりなくあなたは生き、あなたの意志とはかかわりなくあなたは死に、あなたの意志とはかかわりなくあなたは諸王の王たちの王、聖なる者にして賛美される者の前で決算を行おうとしているからです。(ピルケ・アヴォート4：22)<sup>18</sup>

ここにおいて暗に示されているのは、私たち自身の命を絶つことは、[その方]のみがそれ[死の日]を決す[べきお方である]ところの神に反逆することであるから、私たちの死の日を決定することは、私たちが制御してよいものではないということです。しかしながら、ヘブライ語聖書中に見出されるべき自らの命を絶つことに対する何らの直接的禁令も存在しないので、ラビたちは明らかに彼らの宗教文化の受容された一部になってしまっている信念を正当化し得る本文を見つけ出さねばなりません。タルムード(バヴァ・カマ 91b)において、自死の可能性は、創世記9章5節「また確かにあなたがたの命についてあなたがたの血を私は要求するだろう」<sup>19</sup>の釈義の中で言及されています。これは「私はあなたの血を要求するだろう、もしもあなたが、あなた自身でそれ[血]を流したなら」を意味すると解釈されています。しかしこれはより後代のユダヤ法の集成の中に禁令として成文化されていません。

自死の実際の帰結が論じられているのは、-ただし葬りとそれに付随する諸儀式に関する特別な規則の見地でのみですが、-タルムード小篇「スマホート」(エヴェル・ラツパティ2：1-5)においてだけです。[そこには]死者に名誉を与えるために通常なされる儀式-例えば会葬者たちが自分たちの上着を象徴的に裂くこと(ケリヤー)や、弔辞を与えること(ヘスペード)のような-のいずれも、自死者のためには行われるべきではない[とありま

---

18 訳注：A. コーヘン(市川裕・藤井悦子訳)『タルムード入門Ⅲ』(教文館、2006)、193頁。

19 訳注：講演者による。協会共同訳は「また、私はあなたがたの命である血が流された場合、その血の償いを求める。」

す]。その上さらに、伝統的に、自死者は、他の人々から離れて、共同墓地の分離された区画に葬られることになっていました。しかしながら、嘆き悲しむ者たちに敬意と、喪失の只中にある彼らのための支援を表すことに関連した儀礼的行為の全ては、通常通り執り行われるべきとされていました。数世紀を経て、故人に示されるべき敬意に限界を設けたこれらの制約の殆どは、正統派ユダヤ教サークルにおいてさえも、脇へ置かれ棚上げされるようになってきています。また、まさにこれらの、その死を故意の自死行為として認める結果もたらされる深刻な帰結の故に、ラビたちは、これは確かに意図的な行為であったと判定することに気が進みませんでした。同じラビ的資料は以下のように続けます。

もし木や壁から首を吊っているか、転落した人が発見されたとして、その人物が「私はあの屋根の頂によじ上って、飛び降り、死ぬつもりだ」と宣言し、その直後に彼がよじ上り、飛び降り、死んだその一部始終を、複数の者が目撃していたのでない限り、彼は自死者であるとみなされない。ただそのような者だけが自死者であるとみなされる。

こうしてラビたちは、それが自死の事例であると判断されるためには、十全な意志能力、予謀、事前の告知とその行為の複数の目撃者が必要であるとしました。その同じ章は、自死をした子どもは、まさに彼が「明晰な頭脳で行動」していないと判断されるので、自死者であるとはみなされるべきではない、ということを付加しています。自死をした人は「明晰な頭脳で行動」していたのでなければならぬとのその見解は、次第に実際の診療に適用されるようになりました。もし重大な外部からのストレスまたは内的精神的混乱の何らかの証拠が存在するなら、その人は「アーヌス」<sup>20</sup> - 強制されて行為しており、それ故その行為に責任を持ってない、つまり自死として扱われるべきでない者 - とみなされることになっていました。

---

20 訳注：ヘブライ語動詞アーナス「強制する、抑制する」の受動分詞。

これが自死に関する一般原則である。私たちは私たちがなし得る何らかの弁明を見出し、そして言う。彼がこのような行為に至ったのは、彼が恐怖の中に、あるいは大きな苦痛の中にあっただためであるとか、彼の精神が不安定になっていたためであるとか、あるいは彼が－自分はもし生きていれば犯罪を行ってしまうだろうと怖れていたので－自分がやったこと〔自死〕を、するのが正しいと思い込んでいたためであるとか...。ある人物がそのような愚かな行為を犯すということは、彼の精神が混乱してない限り、極端にありそうにないことである（ヨレ・デア－345：5）<sup>21</sup>

### 殉教（キッドウシュ・ハ・シェム、御名の聖別）

それにもかかわらず、自死が十分に自覚的な決断として正当化され得るかどうかラビたちが論争した一つの状況がありました。これこそキッドウシュ・ハ・シェム、神の名の聖別として知られる殉教の場合でした。アレクサンダーによるギリシアの近東征服に続く数世紀間、帝国全土に共通の文化を強制するための諸々の試みが為されました。これに対するユダヤ人の抵抗はマカバイ記に記されています。当時ユダヤ人は彼らの息子たちに割礼を施すことを続けたために、安息日を遵守したために、また豚や外国の神々に捧げられた肉を食べることを拒否したために、殺されました。ローマ帝国の樹立後も同様の迫害は続きました。あらゆる個人の命の保護への強力な投企を伴って現れたラビの運動は、彼らの宗教的伝統のために死ぬ覚悟に対して諸々の制限を設けました。殉教への潜在的な要求を彼らは申命記6章5節という重要な一節の中に見出しました。「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。」彼らは「あなたの魂の全てを以て」－〔アビガイルの言い回し同様〕再びヘブライ語の術語「ネフェシュ」〔が使われます〕－という言い回しに、人はあなたの命まさにそれ自体を以て神を愛すべ

21 <https://www.thoughtco.com/judaisms-view-on-suicide-2076683> 'Judaism's View on Suicide: Understanding B'Daat and Anuss' by Chaviva Gordon-Bennett (updated August 2014) 参照。



きであるとの意味を読みました。(ベラホート61b) この殉教者として死も厭わぬ実例としてよく引用されるのは、その同世代において最も偉大なラビの学者であるとみなされているラビ・アキバの事例です。ローマ人がトーラーの研究を禁じていましたが、無数のラビたちが自分達の命を賭してそれをし続けました。あるラビ的寓話が教え続けることに関する彼らの主張を表しています。

狐が川べりを歩いていると、魚が異なった場所に集まっているのを見た。狐は魚に尋ねた。「何故あなたがたはあちらこちらに逃げているのですか?」

魚は返答した。「人間が私たちを捕まえようと投げ込んでいる網のせいですよ!」

そこで狐は言った。「いい考えがある。何だってあなたがたはこの陸地へ上がって来ないのですか? そうすれば私たちは一緒に暮らせるでしょうに。私の先祖があなたがたの先祖と暮らしていたように」

魚は返答した。「あなたは獣の中で最も利口なものと言われているのですよね? 利口どころか、愚かですね! もし私たちに命を与える場所さえ私たちが怖れているとするなら、私たちに死を与える場所ではなおさらではないですか!」(ベラホート61b)<sup>22</sup>

ラビ・アキバはそのようなトーラーの教師であったので、拷問を受けて死にました。苦しみの只中で、彼は弟子たちに、己が命の全てを以て神を愛すべしとのあの戒めを自分は実行できるものかどうか久しく訝しんでいたが、今ようやく自分はそれを行う機会を得たのだと語った〔ということです〕。それにも関わらず、ラビたちはその申命記の節への対位旋律をレビ記18章5節に見出しました。「私の掟と法を守りなさい。人がそれを行えば、それによって生きる。」ラビたちはこれを「人は神の諸戒律を通して生きるべきであって、

---

22 訳注：講演者の英文に基づく。前後の文脈を含んだ邦訳については A. コーヘン(市川裕・藤井悦子訳)『タルムード入門Ⅱ』(教文館, 2009), 39-40頁も参照せよ。

不必要に、それらのために死ぬべきではない」との意味に読みました。彼らの諸議論は、十戒の中に見出される三つの基本的禁令－偶像礼拝、禁じられた性関係、そして殺人－を除いて、トーラーの他の全ての法は、殉教を苦しむよりも、むしろ脇へ置かれ棚上げされ得る、という原則を導きました。(サンヘドリン74a, ベラホート61b [における議論], マイモニデスのミシュネー・トーラー中イェソデイ・ハ・トーラー5:1-9に成文化された〔結論部分を参照〕)

悲惨なことに、より後代になるとユダヤ人は、神の名のために死ぬべきか否かを選ぶというぜいたくを減多に持ち合わせなくなりました。その代わりに彼らは手当たり次第に集団的に殺されました。十字軍によって、スペイン異端審問の死刑執行人たちによって、「聖体冒瀆」や「血の中傷」の非難に続いて起こった中世ヨーロッパにおけるユダヤ人大虐殺の間中、あるいはナチスの絶滅収容所で殺害された時。ユダヤ教の一般的な思想において、ナチスによる全600万人の犠牲者たちは、彼らの経歴、宗教的投企やその欠如がどうあれ、神の名の聖別のために死んだ殉教者たちとみなされています。

## 幫助自殺

今日、諸々の宗教的かつ人道主義的な価値が、倫理と価値の問題における優先順位を巡って市場で競い合っています。世俗社会に生きる私たちは、私たちの体を単に、私たちが相応しいと思うように利用され、そして処分されるべき、他人の所有物として見なすかも知れません。幫助自殺の問題については、ある一つの同時代的態度が、既に19世紀の作家アーサー・ヒュー・クラフ（1819-1861）による一篇のユーモラスな詩において表現されました。「最新の十戒」と題された十戒のパロディにおいて、関連する節はこう読めます。「汝殺すなかれ。しかしおせっかいに生き延びさせようと努力する必要はない」<sup>23</sup>クラフは医学が普く行き渡り、生命維持が膨大な長寿まで可能と

---

23 <http://www.potw.org/archive/potw238.html>

なった現代より前〔の時代〕を生きていました。今日私たちは、ある人を人工的に生かし続ける機器を、いつ撤収させるのが正しいのかについて、そして末期症状に直面して他者に自分が死ぬのを手伝うよう求める人々にいかに返答すべきかについての難問に直面しています<sup>24</sup>。

私たちが指摘してきたように、伝統的ユダヤ法は命の保護をその最高の価値として位置づけます。そしてこの点に関して末期でさえ以前の欠けのない人生と同じ価値があるのです。ラビたちは死が三日以内に訪れそうである時に、その人を末期症状—術語「ゴウセス」—として認めました。そうした人を、その終わりを速めかねない不慮の害から保護するために、厳格な諸法が制定されました。(スマホート1:1-4) それにもかかわらず、あるタルムード的資料は、瀕死の者に安らかな終わりを求める祈りの可能性を提供しています。

ラビ・ユダ・ハ・ナスィが死んだ日に、ラビたちは公的な断食を布告し、天の慈悲を求める祈りを献げた。…ラビの侍女は屋根に上り祈った。「不死なる者たち〔天上界〕がラビを〔自分達に加わるよう〕切望し、死すべき者たち〔地上界〕が彼を〔自分達と共に留まるよう〕切望しています。どうか死すべき者たちが不死なる者たちを圧倒するという〔神の〕御旨が成りますように。」しかし彼女が、その死に逝く男にとってあらゆる活動がいかに苦痛に満ちたものであるかを目の当たりにした時、彼女は祈った。「どうか不死なる者たちが死すべき者たちを圧倒するという〔神の〕御旨が成りますように。」ラビたちは〔彼を生かし続けるべく〕〔天の〕慈悲を求めて祈り続けていたので、彼女は瓶を取ってそれを屋根から地に投げ落した。吃驚して、彼らは祈るのを止めた。するとラビの魂はその永遠の休息へと旅だって行った。(ケトウボート104a)<sup>25</sup>

24 伝統的ユダヤ法におけるこの問題についての綿密な研究については 'Physician-Assisted Suicide Under Jewish Law' Steven H. Resnicoff (DePaul University College of Law) 1998 (<http://www.jlaw.com/Articles/phys-suicide.html>)を参照。

25 訳注：講演者の英文に基づく。前後の文脈を含んだ邦訳については三好迪翻訳監修『タルムード 3/2 ナシームの巻 ケトウボート篇』（三貴，1994），442-443 頁も参照せよ。

命を保護することへのこの投企がなされているので、正統派ユダヤ教の学者たちは、実質的には殺人行為であるとみなして、幫助自殺に反対しています。おそらく驚かれるでしょうが、二つの主要な非正統派ユダヤ教の運動である、米国の保守派と改革派のユダヤ教は、どちらも同じ伝統的法的議論に基づいて〔正統派と〕同じ結論に至る主要な諸研究を生み出しました。しかしながら、彼らはまた、「自発的」安楽死は、その国に適切な法的予防策が備わっていない限り、容易に「自発的でない」ものになり得るという、より広範な社会的問題と危険性も熟考してきました。彼らは伝統的法に対して〔意識的〕であるのと同様に、同時代の社会的、牧会的諸関心についても意識的であるので、非正統派の運動のどちらも、末期の病気に利用可能な緩和ケアの質を向上させ、適切な情緒的支援を確保する必要を強調してきました。それにも関わらず、非正統派運動の内部に、かなりの苦痛と極度の消耗の状況において安楽死に賛成することを主張する数名のラビたちもいます。その主張は、古典的ラビ的アプローチである生物学的命のスパンを保護するということを超えて、私たちはまた神の似像として創造されたものとして、人間の命の質と神聖な特徴にもまた関わるべきであるというものです<sup>26</sup>。この牧会的アプローチと一致して、ユダヤ教の諸機構は、自死の主題についてより社会全体の議論を励行するための、そしてまた、誰かが危機にあることを示しているかも知れない諸兆候を認識する専門的責任を有した人々を訓練するための、特に若い人々のための、教育的プログラムを促進しています。

---

26 米国保守派のその立場については Elliot Dorff 'Teshuvah on Assisted Suicide' Conservative Judaism Summer 1998 を参照。米国改革派については 'Who shall live...' A Report from the CCAR Task Force on Assisted Suicide June 11 2003 - 11 Sivan 5763. Michael Z.Cahana, Chair CCAR Journal: A Reform Jewish Quarterly を参照。ユダヤ教三派の立場全てについての批評は "There is a Time to be Born and a Time to Die" (Ecclesiastes 3:2a): Jewish Perspectives on Euthanasia. ' Goedele Baeke, Jean-Pierre Wills and Bert Broecker, Journal of Religion and Health 2011 Dec 50 (4) 779-795. (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC3230754/>) を参照。

## いくつかの結論

私たちが知っている - あるいは私たちが知っていると思っていた - 誰かによる自死の行為は、大きな衝撃として臨むかも知れません。それは私たちに、私たち自身の情緒反応のみならず、私たち自身の判断、他者に対する私たちの共感と思いやりの質をも見直すことを余儀なくさせます。いずれの事例も比類無き唯一のものですが、異なる国々や諸文化における自死率に関する極めて一貫した統計が存在します。全くの科学的専門分野である自殺予防学は自死行動と自死予防を研究します。そうした広範な情報展開は誰が影響をうけやすいか予測することを可能にする筈です。しかし同一の諸要因 - ストレス、貧困、家族史、喪失、異なる種類の危機、抑うつ障害 - は示唆的であることができるのみです。その上さらに、その可能性を論じ合うことは、その行為を検討している当人と、そうではないかとうすうす感じている人々のどちらにとっても、大変気の進まないものです。『殺伐たる神 - 自死の研究 -』<sup>27</sup>の著者である作家アル・アルヴァーリーズは、その人生全体がこの可能性への混乱と脅威の中に送られてきた人々がいるかもしれないということを示唆しています。このことを英国の作家スティーヴィー・スミスは、助けを求める叫びが誤解されてしまった、海で泳ぐ人について的一篇の有名な詩において表現しています。実際はその人は、全生涯にわたって、「手を振ってるんじゃない、溺れてるんだ」〔詩の題名の示す通りだったのです〕<sup>28</sup>。私たちがそこから〔講演を〕始めたところの聖書物語もまた、この終幕へと導くかもしれないところの感情の幅 - 時には自滅性 - を指し示しています。

ユダヤ法は、自死行為を法的犯罪かつ宗教的罪とみなす伝統的非難に対抗することを求めました。それは、そのような死を意図的行為と評価することを殆ど不可能にするような諸条件を創出することによってなされました。人

---

27 Al Alvarez, *The Savage God: A Study of Suicide* (Bloomsbury Publishing PLC, New Edition, 2002. Original Edition 1972).

28 訳注: Stevie Smith, "Not Waving but Drowning"の和訳についてはスティーヴィー・スミス(郷司真佐代編訳)『スティーヴィー・スミス詩集』(新・世界現代詩文庫, 6)(土曜美術社出版販売, 2008), 71頁参照。

間心理学の今日のより大きな啓蒙は、そうした〔伝統的〕非難を、誰かをその人自身の命を絶つことへと導いているかもしれないその絶望を理解〔しよう〕する試みへと、置き換えます。しかしその衝撃とそのリアリティは直接影響を及ぼされた人々にとって残っています。葬儀で使われるべき英国改革派ユダヤ教のための祈祷書を編集している時、私たちは嘆き悲しむ者たちのために、その問題と正面から取り組む必要を感じました。〔そのような〕伝統的式文が〔全く〕欠如していたので、以下の祈りが、たとえ一つの理解を〔提供することなどでき〕ないにしても、少なくともなんらかの慰めを提供できればとの希望を以て、構成されました。〔下記「……………」には故人の名が入る。〕

神よ、あなたのみがご存知です。私たち一人一人の心の奥底の隠された所を。私たちが負っているあの重荷を。そして私たちが苦しんでいるあの痛みを。あなたこそは全ての傷を包むまことの癒し手です。あなたこそは全てのことを理解するまことの知恵です。あなたこそは背きの全てを一掃するまことの愛です。あなたこそは赦し慰めるまことの両親です。あなたの深い憐れみのうちに……………の魂を受け取ってください。彼／彼女は死の陰の谷を歩んできました。しかしあなたは彼／彼女を平和の牧場へと伴われるでしょう。彼／彼女はこの世で悲嘆を辛抱してきました。しかしあなたは彼／彼女に永遠の命の喜びを与えるでしょう。

この世で神のわざを完遂することは誰にも与えられていません。なぜならたとえ私たちが私たちの力の全てを尽くしてわざをなしても、その結果は神の御手の中にあるのですから。嘆き悲しむ人々が慰められますように。なぜなら神は生けるもの全てに信実であり、そして神の愛はとこしえに変わることはないからです。

「慰めの神があなた方を慰めますように。嘆き悲しむ者たちを慰め給う方が祝されますように」(ケトウボート 8b)<sup>29</sup>

---

29 訳注：講演者の英文に基づく。邦訳については三好迪翻訳監修『タルムード 3/2 ナシームの巻 ケトウボート篇』（三貴，1994），24頁も参照せよ。